

多文化共生研究所における情報保障の取り組み ランチセミナーにおける聴覚障害者のための字幕保障

愛知県立大学多文化共生研究所・副所長
亀井伸孝

ランチセミナーと字幕保障

多文化共生研究所は、今年度からの新しい事業として、連続企画「ランチセミナー」を開始した。研究所内外のゲストによる短い講演を、平日の昼休み（12:00～12:50）の間に公開で開催し、昼食持参での参加可とすることで、新しい研究成果に気軽に触れる場を増やすことを目的としている。

ランチセミナーの第2回と第3回で、本研究所としては初めて、本学としてもおそらく初めての、聴覚障害者のための字幕保障に取り組んだ。本稿では、その経緯と状況を紹介し、成果と展望を述べる。

実現の経緯

この公開行事における情報保障が実現したきっかけは、2016年度学生自主企画研究の研究グループ「県大における聴覚障害学生への情報保障：ノートテイク支援の課題と解決策の提言」（代表：ハシム・アナスタシヤ・ウランダリ（国際関係学科））である。2016年4月から本学でも本格的なノートテイク制度が発足するに当たって、学生の視点から聴覚障害学生の情報保障を提案していこうとするグループである。本研究所の公開行事に聴覚障害学生が参加することに関連して、情報保障の必要性が提案されたことをきっかけに、本研究所としてもその提案を受け入れ、2回にわたって実施することとなった。

実施実績

今年度は、2回の公開行事において、「遠隔型リアルタイム文字配信」を実施した。

(1) 2016年度第2回ランチセミナー（2016年7月14日、長久手キャンパスH棟H004）

「ベトナム憲法をめぐる最近の動向」鮎京正訓（愛知県公立大学法人理事長）

(2) 2016年度第3回ランチセミナー（2017年1月12日、長久手キャンパスH棟H003）

「ラオスにいったい何があるというのでしょうか？」矢野順子（国際関係学科准教授）

いずれも、(株)アイセック・福井によるシステム協力を得た。講演の音声を、遠隔にいる2名2組のスタッフが10分交替で日本語の文字として入力、そのデータをウェブを通じて講演会場のパソコンに送信し、それをスクリーンに映して利用者に提示するというものである（写真1～3）。

学生自主企画研究の活動の一環と位置付け、2回分の経費はその研究費から支出された。(株)アイセック・福井が、福祉事業としての公共性と将来性を考慮して、特別割引で提供した。主催者側の配慮としては、機材準備に協力したほか、他の参加者たちが違和感をもたないように、司会者が冒頭に聴覚障害参加者のための情報保障である旨を説明した。広報のチラシにもその旨を明記し、(1)では2名の、(2)では1名の聴覚障害参加者がこのサービスを利用した。なお、このような研究や活動の実績が認められ、同グループは2016年度学生自主企画研究最終成果報告会において、全学2位の銀賞を受賞した。

達成と課題

2016年4月に障害者差別解消法が施行され、公立大学においては聴覚障害者のための合理的配慮を提供することが義務付けられた。授業のみならず、公開行事などにおいてもそれは同様のことである。このため、当事者たちの要望に沿って、このような取り組みが強化されていくことが望ましい。

第一義的には、聴覚障害の学生や市民がそのサービスを利用して参加できることが重要である。さらに、ここでは関連するポイントを2点指摘したい。一つ目として、大学側に主催者としての自覚を促すことである。「公開」として行事を開催する以上、さまざまなニーズをもった人が参加する可能性を、

すべての部局の関係者が想定して、準備に当たることが必要である。本学においても、公開行事開催に際して配慮を怠る判断をした事例が過去に存在したが（『日本聴力障害新聞』2016年3月1日）、こうした事故を予防するためにも、主催者に自覚を促す啓発的な取り組みが必要である。二つ目に、多数派をなしている耳の聞こえる大学構成員も、情報保障の場面に日常的に慣れていくことが望ましい。

当事者の参加の権利を守り、主催者における自覚を促し、周囲の構成員たちの寛容さをも育む。これらが同時に達成された時に、私たちは真の意味で開かれたキャンパスを構築することができるであろう。

全学的にこのような態勢がまだ十分に採られていないこと、予算面での準備もあわせて必要なことなど、解決すべき点も多い。これらの問題を提起する意味においても、本研究所および当該学生研究グループの今回の取り組み事例が参照され、今後の対応などにつながっていくことが期待される。

ウランダリ, ハシム・アナスタシャ・木戸志緒子・鈴木愛理. 2017. 「県大における聴覚障害学生への情報保障: ノートテイク支援の課題と解決策の提言」愛知県立大学教育支援センター編『平成28年度学生自主企画研究事業報告書』. 21-40.

「他言語の通訳がないから手話通訳も不要」!?: 愛知県立大学で、准教授がろう者の情報保障を要望
『日本聴力障害新聞』（一般財団法人全日本ろうあ連盟）第795号（2016年3月1日）8.

写真1 第2回ランチセミナーにおける字幕保障

左が講演者のスライド用スクリーン、右が字幕保障用スクリーン。左奥は講演者、左手前2名が字幕サービスを利用した聴覚障害参加者。

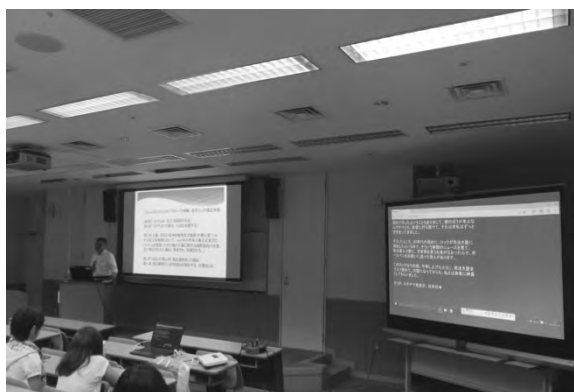


写真2 第2回ランチセミナーにおける字幕保障

字幕サービス利用者の近くに置かれたノートパソコン（右端、机上）と前方のスクリーンに、同時に情報が表示される。



写真3 第3回ランチセミナーにおける字幕保障

左が講演者のスライド用スクリーン、右が字幕保障用スクリーン。中央奥は講演者、右端1名が字幕サービスを利用した聴覚障害参加者。

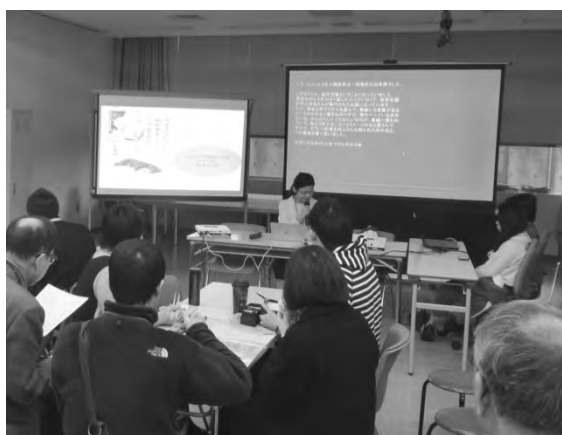


写真1、2：2016年7月14日

写真3：2017年1月12日

いずれも、愛知県立大学長久手キャンパス H 棟のランチセミナー会場にて、筆者撮影